

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：與那嶺盛次

課 題	平成14年度活動の経過及び成果	残 され ている 問 題 点	平成15年度の活動計画
<p>シラヒゲウニ・トコブシシ殖の推進</p> <p>1) シラヒゲウニ殖種の推進 (種苗生産含む)</p>	<p>糸満漁協介類養殖研究会：5月に種苗生産した10,000個の種苗(殻長3cmサイズ)を11月の配合飼料給餌によるシラヒゲウニ養殖試験(技術改良試験)に使用し、現在、試験継続中である。</p> <p>平成15年2月19日県栽培増殖センターから殻長5mmサイズの種苗10,000個を普及センターが譲り受け、海上中間育成試験を同研究会に依頼して実施している。8月31日の試験終了後、結果報告を行った後生残したウニは同研究会が譲り受け、平成15年度の現場実践型技術開発事業「シラヒゲウニの養殖試験」に使用する。また、水産高校でも2～3万個の種苗が生産されており、譲り受けることになっている。</p>	<p>糸満漁協介類養殖研究会： ・現在、糸満漁港沖合防波堤内側に沿整専業の養殖場を造成中で、平成15年5月中には完成予定であるが、完成が遅れると再び台風被害を被る可能性がある。</p>	<p>糸満漁協介類養殖研究会： ・平成14年度技術改良試験の仕上げと平成15年度の現場実践型技術開発事業「シラヒゲウニの養殖試験」を4月から実施する。 ・養殖場が平成15年5月に完成するよう協力する。 ・水産構造改善事業の推進事業等による種苗生産施設を検討する必要がある。</p>
<p>2) トコブシ殖種の推進 (種苗生産含む)</p>	<p>北谷町漁協介類養殖部会：夏期垂下式養殖試験、平成14年7月12日に殻長29mmの種苗1万個を養殖籠100個に収容した。平成15年1月16日測定した結果、試験区2籠の平均殻長は36mmで成長は速い、生残率は98%と良好であった。宜野湾市の埋め立てによる泥の影響があるとのことであった。1kg当たり3,500円で販売している。平成14年12月31日現在の販売額は671,900円であった。また、貝掃除用ハンドクレーナーを導入した。</p> <p>種苗生産は、4月25日と5月8日に採卵を実施し、波板から約4万個(殻長5mm)を取り上げ中間育成を行っていたが、9月5日の台風でほとんどへい死した。また、11月12日と13日に採卵を実施し、現在5～6万個の種苗(殻長5mm)を飼育している。この種苗は平成15年5～6月に殻長20～30mm種苗として出荷可能である。近い内に再度採卵を行う予定である。</p>	<p>北谷町漁協介類養殖部会： ・埋め立てによる泥の影響 ・11月採卵種苗は台風シーズン前に出荷できる可能性があるが、今後採卵する種苗のための台風対策が必要である。</p>	<p>北谷町漁協介類養殖部会： ・埋め立てによる泥の影響を調査し、その対策を検討する。 ・稚貝飼育時の台風対策として一部の稚貝を海上飼育することや簡易種苗生産施設の補強を考えている。 ・水産構造改善事業等により、現在の種苗生産施設の増築を検討する必要がある。</p>
<p>糸満漁協介類養殖研究会： ・平成14年度技術改良試験の仕上げと平成15年度の現場実践型技術開発事業「シラヒゲウニの養殖試験」を4月から実施する。 ・養殖場が平成15年5月に完成するよう協力する。 ・水産構造改善事業の推進事業等による種苗生産施設を検討する必要がある。</p>	<p>糸満漁協介類養殖研究会： ・現在、糸満漁港沖合防波堤内側に沿整専業の養殖場を造成中で、平成15年5月には完成予定であるが、完成が遅れると再び台風被害を被る可能性がある。</p>	<p>糸満漁協介類養殖研究会： ・現在、糸満漁港沖合防波堤内側に沿整専業の養殖場を造成中で、平成15年5月には完成予定であるが、完成が遅れると再び台風被害を被る可能性がある。 ・1月採卵種苗は、20～30mmの種苗サイズに達するのが7月から8月になるため台風対策が必要である。</p>	<p>糸満漁協介類養殖研究会： ・平成14年度技術改良試験の仕上げと平成15年度の現場実践型技術開発事業「シラヒゲウニの養殖試験」を4月から実施する。 ・養殖場が平成15年5月に完成するよう協力する。 ・水産構造改善事業の推進事業等による種苗生産施設を検討する必要がある。</p>

課題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
	<p>平成14年11月7日に冬期小刺式養殖試験として殻長28mmの種苗1万個を養殖籠32個に収容した。平成15年2月17日測定した結果、試験区2籠(各300個収容)の平均殻長は30.9mmで成長が速く生残率は94.5%と良好であった。試験区1籠(400個収容)の平均殻長は30.8mmで成長が遅く、生残率は71.0%と悪かった。これは給餌量が少ないことや籠の破損によるものと思われる。</p> <p>平成13年12月採卵した種苗6.3万個(殻長14~25mm)を販売し約55万円の売り上げであった。平成15年1月28日と29日に採卵し、受精卵を収容した波板水槽の水温を22℃に維持したため、16日後の確認では、推定30万個の稚貝が付着していた。</p> <p>名産漁協：陸上養殖(巡流水槽、二重底方式)、平成14年7月8日に殻長28mmの種苗6千個を収容した。9月5日の台風で施設等が損害を受けほとんどトコブシがへい死した。漁協と今後の対応を検討した結果、11月で養殖試験を終了した。</p>	<p>石川市漁協： ・台風時の赤土対策</p>	<p>石川市漁協： ・台風時に付着した赤土をできるだけ早く落とせばへい死を防ぐことができるため、その対策を講ずる。 ・平成14年度の新技术術定着試験で種苗生産試験を実施する。</p>
<p>石川市漁協：平成13年度冬期垂下式養殖試験のトコブシを平成14年7月から出荷、8月5日試食会開催。1kg当たり3,500円で販売した。9月5日の台風で約半分トコブシがへい死した。平成14年12月31日現在の販売額は323,412円であった。また、貝掃除用ハンドクリーナーを導入した。平成14年11月7日に冬期垂下式養殖試験として殻長28mmの種苗1万個を養殖籠100個に収容した。平成15年2月17日測定した結果、試験区2籠の平均殻長は39.1mmで成長が速く、生残率も99.5%と良好であった。</p> <p>なお、平成14年12月31日現在、県全体の養殖委託試験のトコブシ販売額は、1,858,204円(販売個数17,194個、販売量391.1kg)であった。</p>			

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：瀬 底 正 武

課 題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
<p>ヒトエグサ人工採苗試験 (遊走子の多量採種技術確立)</p>	<p>より安定した採種技術確立を目的にこれまで人工採苗試験が繰り返されてきたが、実用化までには至っていない。これまでの知見を精査検討し、接合子の多量培養と遊走子の多量採種技術の確立及び超夏保存時の雑菌対策等実施する。</p> <p>1. 成熟藻体の確保 1) 採取地を広げ、より熟度の高い母藻を確保するために北中城、恩納、喜屋武、西崎沿岸と北中城の養殖網を選定した。 2) 時期は予備調査も含めて、3月末から5月中旬までとした。</p> <p>2. 配偶子の採種と接合子の培養 1) 配偶子の採種 (別紙作業手順参照) 配偶子の採種作業は、成熟予備調査として、3月27日を皮切りに本調査を、4月4日、4月10日、4月15日、4月25日、5月13日の6回実施した。 <配偶子採取状況> 延べ5回にわたり配偶子の採種作業を行ったが、各回とも満足の行く採種が出来なかった。5回試みた中で5月13日採種、同14日処理した養殖藻体に配偶子の放出があった。その他の天然藻体については、すべて配偶子の放出が確認出来なかった。これまで、ヒトエグサ人工採苗試験の初歩的段階で失敗した事例はない。原因について良く分かっていないが、今回は天然藻体 (これまでは、どちらかと言えば手軽に採種可能な養殖藻体を中心だった。) の配偶子を確保するのが目的であったため成熟時のタイミング (大雨による淡水の刺激で藻先が白濁化、潮干待りによる採取後等々) の問題、長崎 (島原) では今年も冷夏で水温が低く採種タイミングに苦労したと報告もあった。</p> <p>2) 接合子の培養 (別紙作業手順参照) 5月13日、5回目の採取藻体 (養殖藻体) 放置された養殖網の残藻を採取し使用する。 一晩暗処理後配偶子の採種作業を行う。開始後10分程度で配偶子の放出が見られ、20~30分には曇状を形成する。全体的に高密度の配偶子は得られなかったが、45分経過後に</p>	<p>断片的ではあるが、ヒトエグサの人工採苗試験は何回か実施されてきたが、母藻の成熟度の段階でつまづいたのは今回が初めてである。 天然自生体と養殖藻体の成熟の違い等究明する必要がある。特に天然自生体の場合は、人為的に採種された後等大雨による自然的刺激による早期流失等が考えられるので、出来れば (不可能に近い) 人為的に採取出来ない地域等場所の確保が母藻採取条件になる。さらに成熟度の観察回数を多くすることも母藻採取の重要な点であろう。 養殖藻体については、成熟度の判断が比較的簡単で母藻も手に入りやすい (養殖残藻は雨による流失が少ないことや人的採取の心配がない。) ことから養殖物が多く使用されてきた。他府県では (三重県・長崎県等) 出来るだけ保存種苗は天然物 (品種改良等育種の面) に限ると言われている。</p>	<p>平成15年度の活動計画</p> <p>1. 配偶子が採種出来なければ、人工採苗試験は始まらない。したがって、養殖藻体による配偶子の採種も視野に入れながら、出来るだけ天然自生体の成熟度調査を徹底して実施したい。</p> <p>2. 配偶子の多量採種後は、接合子の培養、遊走子の放出条件の確立、採苗網への展開方法等検討したい。</p> <p>* 項目毎の詳細については、平成13年度実施報告書に記載した。</p>

課 題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
	<p>接合子付けに入る。接合子付けの時間は一般的には1時間以内が勝負である。今回の場合、1時間以上経過したにもかかわらず種板（接合子板）への接合子の着生が非常に少なく（一般的には×600倍で1視野当たり10個体）×400で1視野4～5個体と非常に少なかった。5月15日、接合子板を観察した所前日とほとんど変化がなかった。この時点で接合子の培養を断念しようと思っただが、母液採取の目的が立たなかつたので、取り合えず培養を行うことにした。同日より培養作業にはいる。6月20日まで換水作業や培養液（たからの培養液等）の添加、雑菌処理作業を行ってきたが、夏場の高水温と並行して雑菌の異常繁殖が急速に進んだため60枚の種板全板を検査したところ板によっては全く接合子が着生していない板も数多く見られたためこれ以上続けても最終的に良い成果は得られないと判断し、当日をもって同試験を中止した。（中止時の接合子の大きさは×200で30μ）</p>		

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：中村 勇次

課題	実施時期	実施場所	対象	協力者	経過及び成果	問題点及び今後の課題
重点普及課題 (技術改良試験) モスク浮き流し養殖試験	10月～	石川市	石川市モスク養殖生産部会	石川市モスク養殖生産部会	<p>【目的】 モスク養殖は、気象条件に大きく左右されるため、豊作と不作の差が大きく漁業者は不安定な生産を余儀なくされている。その中で技術的にネックになっているのが中間育成後の本張り養殖方法である。従来の上下)や漁場移動が容易でないことから発芽後の生育不良の原因となっている。よって、浮き流し養殖を実施し、安定した養殖生産技術の確立を図る。</p> <p>【平成13年度実施内容】 浮き流しに移行する前の地張りの段階で沖制のウール漁場よりも、以前から行っている砂地漁場を中心として地張りを行ったため、前半は雑藻のためほとんどの網が本張りに移行できなかった。後半は、沖側のウール漁場で芽出した網を、浅場の砂地漁場への半浮動式浮き流しと、深場のタイヤーカーにワイヤーを通して作った側張りに半浮動式で浮き流し養殖を行った。結果、砂地漁場では、雑藻(シオミドロ)が繁茂し、収穫できなかった。深場漁場では、ワイヤーが切れてしまったため、鉄筋によるヒビ建て養殖に切り替えており、若干の収穫が出来た。</p> <p>【平成14年度実施内容】 今年度は、沖側ウール漁場とワイヤーを使って半浮動式養殖を試みた場所(高質砂礫)の2カ所で地張りを行ったが、砂礫漁場の芽出しが良かったので、前半100枚・後半100枚の計200枚を砂礫漁場へ沖出し地張りしている。現在、側張りロープを地面に設置した状態で地張りをしているもので、様子を見てこれをそのまま浮き流し養殖に移行する。この場合、1セット20枚程度の浮き流し養殖になるため、従来のヒビ建て養殖と比較を行いながら試験を進める。</p>	<p>ウール漁場は、鉄筋が打ちにくい為、土糞で地張り網を固定していることと、地張り網にウールが絡まって網を展開するのに苦労している。今後、その対策を検討しなければならない。</p> <p>前回と同じ失敗を繰り返さない為に、浮き流しに移行してからはさらに巡回を徹底して浮き流し養殖の調査を行う。</p>

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：山田 真之

課 題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
<p>タチウオの資源管理 (深海域タチウオ)</p>	<p>・昨年までの統計調査が県内出荷分のみであったため、農林水産統計年報を用いてタチウオ漁が本格化した平成3年以降のデータを調査した。その結果平成3年には年間1tの漁獲であったものが平成6年には52t、平成7年には63tの漁獲があった。しかし平成8年以降減少し、12年には22tの漁獲になってしまっている。</p> <p>・水試の事業報告からタチウオは本島周辺の水深300m前後に分布しており、特に残波岬の西方海域～チービシ・波嘉敷島北側、ルカン礁南方で良く釣れた。盛漁期は9月から12月である。成熟サイズは350mm程度から5月頃産卵する春型と11月頃産卵する秋型がいる。</p> <p>・実際に漁業を行っている具志川の安藤名氏と浦添直野湾の横田氏に話を聞いた。東部域では漁業を行っているのが安藤名氏だけのため比較的資源の減少が遅く、H13までは水揚げが比較的安定していたということ。H14は安定して釣れず、操業を早めに取り上げた。西部域ではかつては日帰り150kg釣れるほど資源があったが、今では幻の魚になりつつあると言った。</p>	<p>・水試による調査でも具体的な生態が解明されていない。そのため体長と年齢の関係も不明である。</p> <p>・宮古・八重山地区ではほぼ漁獲がないことから分布域はかなり限定されていると思われる。その分布域の特定も必要となってくる。</p> <p>・県内で行われている漁獲方法が一本釣りであり、漁獲サイズの規制が難しい。その上生態水深が300m前後と深いことから一度漁獲してしまうと、再放流が不可能な状態になると思われるので、資源管理方法は産卵期の漁獲規制が漁場全体の規制が考えられる。</p> <p>・とりあえず取り組むにしても、成長に関する明確なデータがないことから何年後に資源管理の効果がでてくるか不明。</p> <p>・比較的沖側の近海まで与輪船を含めた内地漁船が来て操業を行っていることから、最終的には県内だけでなく、内地との合意形成が必要。</p>	<p>・生態が解明されていないため、データによる資源管理が難しい。そのためとりあえず沖側本島西岸域の好漁場2カ所ほどを禁漁区にして操業を押さええることにより、数年間の資源の変化を観察することから始めたい。操業者の同意の得られる規制漁場の選定を行う。候補地としてはチービシ北（北緯26度18分、東経127度38分）付近と恩納村沖（北緯26度31分、東経127度48分）付近である。この2地点はかつての調査で好漁場とされている。</p> <p>・東岸域は操業者が少いため、水揚げの動向を見ながら今後考慮したい。</p>

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：大城 信弘

課 題	平成14年度活動の経過及び成果	残 され ている 問 題 点	平成15年度の活動計画
クビレオゴノリの増養殖	<p>昨年度実施した種付けブロックを継続観察すると共に、今年度は新たにウミギクガイ及びヒビ網への種付けを試みた。又、人工母薬用に純粋分離されたオゴノリをプラスチック内で継続培養した。</p> <p>(1) ブロック種付け 昨年度種付けし、浜井出地先に移した20個を継続観察した。12月18日の観察では厚さ20cm程度の砂に埋もれたが、ブロックを砂から掘り出し継続観察。15年2月22日の観察では僅かに10cm程度の1株のみ生育。</p> <p>(2) ウミギクガイ種付け 5月10日、ステンレスタンク(2m×1.59m×0.7m高)を用い、天然母薬12kgで陰干し処理後種付け。12日の観察では100倍視野に1~2個、20日の観察では30~100個の胎子付着。21日に5個連を70連作成。25日、浜井出前のウニ礁内に沖出し、大部分は海底に接して設置する(浜井出クルーループ)。その後7月23日に台風で埋まった連を砂から引き上げたが、10月4日の観察では連は一つに絡まり、1/4程度は埋まっていた。再度砂から引き出すが、未だ発芽は確認されず。12月中旬の観察では殆どの貝殻で数mm~2cm程度の発芽を確認(崎山)。2月22日の観察でも状況は殆ど変わらず、長いもの先端はちぎれた状態のものが多い。</p> <p>(3) ヒビ網種付け 6月18日に、ウミギクガイ種付けの残りにヒビ網5枚をセット、翌日に母薬約5kgを追加。7月15日、塩分低下(20%)換水。21日、母薬が溜み、水も茶褐色に色づき換水。7月23日、水深約2m及び4mの2地点に、海底に接すると、海底から浮かせた中層張りで沖出し。</p> <p>その後、10月4日の浅い方の網の観察では、5cm程度のイバラノリが多数付着し、僅かだが、1cm程度のオゴノリらしき芽生えが観られた。12月18日には両方の網共にオゴノリの発芽が明らかで、数mm~4cm程度。中層張りの網よりも海底に設置した網に発芽が多く、さらに深みの網よりも浅瀬の網で多い傾向に有る。発芽は多い部分は一節に8個以上。</p> <p>2月22日の観察では12月の観察より少々伸び、長いのは</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・12年度継続観察は、1年ではかなり壊れた。連の作成方法を工夫するか、蠣殻より丈夫な基質の検討が必要で、今年度はウミギクガイを試みた。 ・12年度は魚、13年度はナガウニによる被害があり、一部は完全にオゴノリが消滅した。これらの食害対策。 ・基質がフジツボ、カキ類、ホヤ等の付着動物や、その他の藻類に覆われ、オゴノリが消滅した。 ・継続的にオゴノリを生育させるには、これら難付着生物対策が必要。 ・養期の採苗や、継続養殖の場合台風シーズンの夏場を経過する。台風の波浪が防げる場所は極めて限られ、増産には波浪対策が必要。 ・今の所、天然でのオゴノリの生育場は限られている。漁場の拡大には漁場に応じた養殖手法の検討が必要。 ・オゴノリ養殖の試みは始まったばかりで、生育可能範囲など基礎的な知見の収集もこれからである。養殖を進めるに当たって、早急な適正漁場の把握が必要である。 ・実際の養殖では大量の種が必要とされ、人工培養種培養施設の確保と実用規模での大量採苗場の整備が必要。 ・採苗後陸上池で、肥培管理することで生育を確実に速くすることが出来る。夏場の台風対策等もあり、中間育苗場の整備が必要。 ・ヒビ網では中層に浮かした部分より、接地した部分の発芽が良い。発芽条件の究明と発芽適地の探索が必要である。 	<p>これまで種付けされ、沖出しされたウミギクガイ連、ヒビ網、昨年度のブロックの継続管理。</p> <p>プラスチック培養の母薬を用いて、人工培養種での大量採苗を行う。</p> <p>ブロック、砂利、網等、各種付着基質で採苗し、漁場毎の適正手法を検討する。</p> <p>ヒビ建て養殖網での実用規模での試験を実施し、生産物の収穫を試みる。</p> <p>食害防止ケージを作成し、ケージ内外での食害比較試験を行う。</p>

課 題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
	<p>5cm程度であるが、殆どは数mm。長いものの先端はちぎれているものが多い。ヒビ網は他の藻、特にマクリの付着が著しい。</p> <p>(4) フラスコ内母藻培養 平成6年に分離培養された株、及び18年に水試増殖室で分離された株を継続培養した。 両株とも、8L梅酒瓶各1本、計2本を7月12日に済井出グループ、7月16日に大宜味グループで培養開始。他に駐在で6本を培養した。その後大宜味グループ管理、済井出グループ管理、駐在管理株でいずれも水試分離株で胞子・発芽体が確認された。 その後、済井出、大宜味グループの管理株共に緑藻類の混入で生育が思わしくなく、回収統合した。駐在管理株は9月の台風16号で培養容器が破損し一部は逸失したが、洗浄後培養を継続し、現在総量は1kg程度。済井出の種付け設備も台風で壊れ、現在まで人工培養種での種付けは行われてない。しかし3月に大宜味グループで珊瑚礁及び、建築用のガラスに種付けし、放流予定である。</p> <p>(5) 食害防止試験 現在食害防止ケージを作成中であり、完成後繁殖を内に設置し、食害の比較を行う。</p> <p>(6) 培養母藻によるユミカタオゴノリ発芽試験 水試増殖室で分離された、ユミカタオゴノリ培養株で恩納村漁協青年部の協力でヒビ網への種付け発芽試験を行った。母藻の培養も漁協独自で行い、10月10日から種付けを行い、2月まで順次仲だし試験を実施したが発芽は確認されてない。今後は池での増殖を検討。</p>		

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：牧野清人

課 題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
<p>シャコガイ式養殖試験 (技術定着試験)</p>	<p>水産試験場八重山支場で稚苗生産されたヒレジャコ500個を今帰仁漁協沖にケージ投入したが、上蓋の固定を誤りその後の台風で散逸させた。その後新たに1,000個を入手し、試験を再会したところ、ヶ月で3mmの成長が見られたが、12月に原因不明の大規模死が起こり、約20mmの稚貝がほぼ全滅した。一方、9月上旬に入荷したヒレナシジャコは現在生残、成長共に順調で、平均殻長28.5mmとなっている。</p> <p>ケージ養殖2～3年目の150mmサイズのヒレジャコ、ヒレナシジャコを名瀬漁協及び活魚取扱店に出荷したところ、1個あたり300～400円の値が付いた。</p>	<p>12月の大規模死の原因について、環境条件を中心に調べる必要がある。一定期間の陸上養殖施設の整備も考慮するべきと思われる。禁漁期間中に出荷する際、養殖物であることを周知させる方法について検討する必要がある。</p>	<p>1. 定期的な養殖シャコガイの測定 2. 販売促進を目的とした市場調査 3. 養殖物であることの周知徹底 4. 漁業権取得に伴う養殖実用化試験</p>

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：石川貴宣・島田和彦

課題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
海ブドウ陸上養殖	<p>県内で陸上養殖が成功している施設を視察し、そこでの養殖技術を参考にして養殖試験を行ってきた。</p> <p>春期に生産する海ぶどうは、粒も大きく、見栄えの良い海ぶどうが生産できた。夏期に生産する海ぶどうは生長途中で配偶子を放出し、試験は失敗に終わった。</p> <p>秋期以降は、配偶子放出はみられなくなったが、生産する海ぶどうは全体的に小ぶりで葉状部の短いものが多く、品質的に良いものが生産できていない。</p>	<p>7月以降、植え付けしたぶどうは配偶子を放出し枯れてしまったため、生産ができなかった。配偶子放出の原因がわかっていない。</p> <p>春期を除き、生産する海ぶどうは、全体的に小さくなくなった。葉状部のびんがなかったり、品質の良い海ぶどうが生産できていない。</p>	<p>安定的に海ぶどうを生産するための養殖条件を把握し、海ぶどうの陸上養殖技術の確立を目指す。</p> <p>海ぶどうの流通状況の調査をおこなう。</p>
平良市漁協改管計画の推進	<p>規約等の見直しの指導を今年度も実施した。資格審査委員として組織作りに参画したが、十分に機能させることはできなかった。</p> <p>経理システム研修は、未実施であるが、職員の見直し・配属転換を推進し、役員・職員に対する講習会を実施した。債権回収の指導を行い、その役割分担を明確にする。また、実際の回収に当たっては、赤土定点視測は未実施。営業活動については、モスクの生産協議会において品質基準を設定し、漁協搬入時に事前検査を実施した。</p>	<p>14年度中途から新役員体制に移ったが、役員並びに職員の意識が低く、特に最も重要な役割である組合長のリーダーシップの発揮が甚だ不十分であり、このままでは組合の存続も危ぶまれる。特に今年度もクルマエド養殖の生産が、疾病対策の不十分さにより減産となっており、来年度も減産となると組合は存続そのもの是非を問われる。そのような非常に厳しい状況になるものと思われる。その改善のための十分な検討が必要である。そのためにも経営感覚を持った職員・役員の見直しが必要である。また、資格審査の適正化が未だ十分に達成されておらず、現在の状況からその困難性が顕著である。また、資格審査の適正化が未だ十分に達成されておらず、それに向けた努力が必要である。</p>	<p>現在、経営改善管理委員会の事務局は、宮古支庁にあるが、より良い支援体制構築のために、平良市へ移管する。</p> <p>残された課題については、平良市と協力して取り組む。</p> <p>赤土視測は、海上での位置の決定が出来なかったため実施していないが、来年度早々にGPSが入手できるため、西原地区で実施する計画である。</p>

平成14年度重点普及課題実施報告

担当者：吉田 聡

課題	平成14年度活動の経過及び成果	残されている問題点	平成15年度の活動計画
<p>与那国町におけるシャコガイ ケージ養殖</p>	<p>昨年度の久部良地先における養殖試験ではケージの流失等により成功しなかつたため、10月に比川地先の試験養殖漁場に設置。久部良地先ではケージ設置と種苗導入を同時に行っていたが、前回のようケージが流失する可能性を考慮して、設置から種苗導入まで期間を置くことにした。3ヶ月経過後、ケージの流失、移動がなくなつたことと固定されていたので、1月末に試験養殖用とレンジャコ種苗1,000個と、今年度要望していた種苗1,500個（最小7.4mm、最大16.1mm、平均9.59mm）を導入した。また、その際ケージに海藻と有孔虫が大群に付着していたため、清掃を行った。</p>	<p>清掃等の管理は、種苗導入時、および水産試験場八重山支場が実施しているコンクリート板養殖でおこなったため、今後は、有害生物等が入っている時の対処および間引き等の管理を行えるようにし、歩留まりを落とさないように、出荷サイズまで成長させる。</p>	<p>定期的に管理を行い、歩留まりを落とさないようにする。また、冬場は現在の固定法でうまくいっているが、台風時には事前に対策を練り流されないようにする。</p>